

年間第二十七主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 21：33 - 43

イエスは祭司長と民の長老に譬えを語る：ある家の主人が葡萄園を農夫たちに貸して旅に出た。収穫の 때가近づいた時、絶えず僕たちを送ったが、撃ち殺された。さらに、自分が送った息子も殺された。葡萄園の主人はその悪人どもを酷い目に遭わせて、収穫を納めるほかの農人たちに貸すにちがいない。家を建てる者を捨てた石、これが隅の親石となった。神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。

（二）カテキズムの響き：（『カトリック教会のカテキズム』の番号 #529－530、755、762－765、1804-1805、1849、2261；YOUCAT #309－313）

神の畑に古いオリーブの木が成長します。その木において、ユダヤ人と異邦人との和解が行われています。神の救いの計画は、イスラエルが神の民として選ばれたときに始まります。イスラエルはこの選びによって、あらゆる国の未来における召集のしるしとなりました。しかし、すでに預言者たちは、イスラエル民族が契約を破ったことを糾弾し、新しい永遠の契約を告知します。新しい契約を制定し、教会を始めるために、御父は御子を世に派遣し、神の国の到来を宣言します。神の国は、キリストの言葉と業と現存という親石によって、人々の前に現れます。教会は神の国の萌芽と始まりであり、十字架上で亡くなられたキリストの、やがで貫かれた心臓から生まれました。現在、教会は選ばれた葡萄畑として天上の農夫によって植えられました。キリストは真の葡萄の木であって、枝である私たちに生命と実を結ぶ力を与えます。私たちは、教会を通してキリストのうちに留まるのであり、キリストなしに何ものもなしえません。

教会という葡萄畑の中に結んだ実とは、人間的徳は人間の力で習得できる倫理徳です。四つの徳が要の役を果たします。それゆえ、枢要徳と呼ばれます。その枢要徳とは、賢明、正義、勇氣、節制の四つです。キリスト者の倫理生活では、聖霊のたまものによって支えられなければなりません。そのたまものとは、人間を聖霊の働きかけに素直に従わせる恆久的な心構えのことです。聖霊の七つのたまものは、上智、聡明、賢慮、勇氣、知識、孝愛、主への畏敬です。聖霊の実とは、聖霊が私たちのうちに永遠の栄光の初穂として実らせる完徳です。逆に、罪とは、理性や真理、そして正しい良心に背く過ちです。それは、人間の本性を傷つけ、その連帯を損ないます。だから、無害の人間を故意に殺害することは、人間の尊厳や並びに創造主の聖性とは相いれない重大の罪です。十字架上で捨てられ、殺されたイエスは、主に属する初子であることを示されています。シメオの予告によって、異邦人を照らす光、イスラエルの誉れと称えられ、同時に反対を受けるしるしであると告げられました。キリストの苦しみと死とは、神が万民のために整えてくださった救いをもたらす十字架の、もう一つの、完全で、比類のない奉献を告げるものです。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#377-383 人間の罪、及び人間の徳における枢要徳

392

#389-390 聖霊のたまものと聖霊の実

最後の祈り：神である父よ、聖霊のたまものによって、罪から解放され、人間の徳を実践し、実を結ぶことができますように。